

□防災教育の不思議な力 ～子ども・学校・地域を変える～

兵庫県立松陽高校教諭 諏訪 清二

1. 根拠のない安全感

被災者がテレビのインタビューに「まさか自分がこんな災害に遭うとは思ってみなかった」と答える。「今度また大きな余震が来たら、どうしたらいいかわからない」と不安を漏らす。

災害に遭遇した人は、型にはめたように同じ反応をする。誰もが、自分だけは災害に遭わないと思いついていたからだろうか。

もちろん、繰り返し災害に遭っている地域では事情が違おうだろう。東北地方の太平洋側のように、自分か親か祖父母の世代には大きな津波を経験し、その体験がリアルに語り継がれている地域では、災害への意識は高い。防災教育も、災害がないと思いついていて地域と比べると、熱心に行われている。それでも、未来の災害の想定を信じ込んで、それを超える被害が発生するとは思ってもない。

災害に対しては、誰もが根拠のない安全感を持ってしまっているのである。そんな市民に災害に対する正しい認識を与え、適切な備えと対応を熟知させるには、防災教育を行うことが一番の方法である。日本はそろそろ本気で防災教育にとりくまなければならない。冒頭のインタビューがこれからも繰り返されるとしたら、それは教育の敗北でしかない。

二つの大災害と多様な防災教育

私はこれまで、防災教育をいくつかの視点で分

類しようと試みてきた。

災害時の人々の行動を考えると、三つの防災教育に分類できる。「Survivor となるための防災教育」「Supporter となるための防災教育」「市民力をはぐくむ防災教育」である。

災害体験を中心に置いた防災教育は、命の大切さや助け合いの素晴らしさなどの「価値の存在を教える防災教育」と「価値を発見させずとんと飲み込ませる防災教育」に分けてもいい。私は前者を批判的にとらえ、後者に教育の可能性を見出している。

阪神・淡路大震災(1995)と東日本大震災(2011)という二つの巨大災害をターニングポイントとして、防災教育が変化、進化してきた事実をまとめたこともある。

阪神・淡路大震災前は、「避難訓練」と「理科教育」が防災教育とほぼ同義であった。ほとんど防災教育など行われていなかったと言っている状況で発生したあの大震災。多くの命が瞬時に失われた事実から、防災教育は対応型から「備えの防災教育」へとシフトしていった。被災地では「心のケア」と「災害体験から学ぶ防災教育」が生まれた。

被災地の外では災害の体験だけに頼るのではなく、他の要素も取り入れた「防災+αの防災教育」が生まれた。

そして、東日本大震災が発生した。大津波の教訓は、想定を信じるなどということであろう。災害は想定通り起こるわけではない。状況を見て、臨機応変に動ける力を持った市民の育成が必要だと

分かったのである。

「未災地」という発想と「正解」のない防災教育

本稿では、被災地と「未災地」という視点で防災教育を分類し、そこから防災教育が持つ不思議な力を分析して、防災教育がなぜ子ども、学校、家庭、地域、を変える可能性を持っているかを論じてみたい。

「未災地」は私の造語である。東洋医学の「未病」をもじって作った。一見、健康そうな人も病気の一步手前にいるかもしれないという未病の発想は、そのまま、一見災害がなさそうな地域も、未来にも災害がない地域であり続けるのではなく、実は次の災害の一步手間にあるという発想である。日本中が、「未災地」であると言っていい。

「未災地」と被災地では防災教育への考え方が違う。「未災地」で防災に関心をもつ人々の多くは、もし自分たちが災害に遭うとしたらと仮定して、その瞬間にどう対応したらいいかを学びたいと願っている。

これらの疑問には、もちろん答えがある。しかし、「未災地」の防災教育の最大の欠点は（正確には、防災の知識を教えるだけでよいと考える人々が生み出している防災教育の欠点である）、正解を教えようとするところにある。

「地震が発生したら机の下に隠れなさい」

では、机がなかったらどうしたらいいのだろう。ネパール地震（2014）の被災地で、住民や教育、NPO 関係者から、「地震が発生したら机の下に隠れる」と教えられていた子どもが、外で遊んでいたにもかかわらず、机の下に隠れようと家の中に入って、倒壊した家ごと押しつぶされてしまったという事例を少なからず聞いた。ひとつの正解しか伝えない防災教育の危険性を示している。

「大雨洪水警報や大津波警報が出されたら速やかに指定された避難所に避難しなさい」

ハザードマップをよく見ると、その地域の指定避難所が堤防より低い場所や急斜面のふもとにあることもある。想定を疑ってみる姿勢を育てる必要もある。

「防災+ α の防災教育」

「未災地」では、このような正解の断片だけを教える防災教育への反省から、斬新な防災教育が生み出されている。

多くの人々にとって災害は忌まわしく、暗く、恐ろしいものだという印象から、勉強してみたいという意欲がそがれてしまっていた。その意識を払しょくし、防災の勉強は楽しい、役に立つという印象も伝えよう、つまり学習者のモチベーションを高めようという発想から生まれたのが「防災+ α の防災教育」である。防災の学習にほかの要素を加えるのである。

例えば、災害時に一番弱い立場に置かれる障害者や高齢者の支援を加味すると、防災と福祉の学習が重なってくる。日常の福祉の延長に災害時の要援護者の支援が存在することが分かってくる。福祉に興味を持つ学習者を、防災の学習にも導いてくれるだろう。

地域の特産物（例えばブドウ）やそれを育てる地形（例えば扇状地）の学習を通して子供たちは、地域を知り、扇状地周辺に固有の災害を学ぶ。

川での魚釣りやボート遊び、生物の観察などを通して自然の恩恵を学ばせながら、水害の怖さや備え、心構えを学ばせる実践もある。楽しい活動が加味されることで、自然の恩恵と恐怖への子ども意識は格段に高まるだろう。

モノ作りを通して防災を学ばせる取り組みもある。工業高校の生徒が、太陽光発電の非常誘導灯をつくって、地域の人々の避難に役立てる。あるいは、「かまどベンチ」と呼ばれる、普段はベンチだが災害時には炊き出しのかまどとしても使えるベンチを制作し、高齢者施設や公園、小学校に

設置する。ものづくりという+αだけではない。高齢者や子どもたちと協力してのベンチ製作は、人の輪を広げていく。災害時の支え合いに一番必要な、地域の人々の「顔合わせ」ができるのである。

地域安全マップは、とりくみ易さと面白さ、家庭や地域を巻き込んでいく力もあって、どんどん広がっている。子どもたちが作ったマップには、地域に存在するリスクと避難所だけが記載されているのではない。子どもたちの好きな場所、バリアフリーの喫茶店、交通安全情報、美しい夕日を眺めることができる丘、…など、多様な情報を掲載している。地域歩きの段階では、地域住民も参加する。+αの宝庫である。

考えさせる防災教育

備えの防災教育もどんどん進化している。

持ち出し袋に入れておくべき物品を単に教えるのではなく、子どもたちに考えさせ、発表させるといったアクティブな授業が面白い。子どもたちは災害をリアルに想像し、自分と家族に必要なグッズを考える。弟や妹の絵本、おじいちゃんの薬手帳、自分のゲーム、お父さんのめがねなど、当事者でないと気づかないものをいくつも挙げてくる。

牛乳パックを利用した耐震の勉強も、家庭を巻き込む力を持っている。まず、地震で倒壊した家屋の写真を子どもたちに見せる。それから倒れない家屋を建てる技法を、牛乳パックを使って考えさせる。パックを輪切りにして二つ重ねると2階建て、三つ重ねると3階建ての住宅の枠組みができる。四角を重ねているだけなので、揺らしてみるととてもよく揺れる。地震に弱そうだ。そんな脆弱な建物を補強しようと水を向けると、子どもたちは嬉々として作業する。

残った牛乳パックを使って、一面を壁にしたもの（耐震壁）、斜めの補強材を入れたもの（筋交い、火打ち）、1階と2階を貫通する柱を取り付けた

もの（通し柱）など様々なアイデアを子どもたちは編み出していく。最後に、実際の建築に子どもたちのアイデアが使われている証拠写真を見せ、そのアイデアの正当性、優秀性を褒めると、瞳が輝く。家に持ち帰って親に見せるのが宿題。きっと、うれしそうに親に話をするだろう。

「学力の樹」と防災教育

「学力の樹」という発想がある（「学力を育てる」岩波新書／大阪大学人間科学部／志水宏吉教授）。葉っぱは「知識・技能」で総体として力を発揮する。葉っぱは時期が来ると落ちるが、いったん獲得した知識・技能も使わなければ剥落していく。しかし、春に芽吹くように新たな知識・技能が獲得されていく。幹は「思考力・判断力・表現力」に例えることができる。情報を収集し、考え、相談し、判断して、行動する力である。身につけた「思考力・判断力・表現力」は葉っぱのように剥落することはない。根っこは「意欲・関心・態度」、言い換えれば、木が大地にしっかりと根を張るように、子どもたちの学びのアイデンティティとなる。

防災教育をこの学力の樹になぞらえて説明すると分かりやすい。

葉っぱは防災に必要な知識や技能である。地震の発生メカニズム、正しい備え、地震発生時の対応の仕方、けがの手当て方法や心肺蘇生法など、習得しておくべき知識・技能はたくさんある。

災害時に私たちは、周囲の状況を観察し、情報を集め、考え、判断し、時には誰かの助言を求め、相談し、自分がとるべき行動を決定し、決断を行動に移す。これが幹である。災害を生き延びるための必須かつ基本的な力というだろう。

根っこは、災害といった自然の恐怖や自然が私たちに与えてくれる恩恵、災害を受ける社会に対する関心や、防災にとりくもうという意欲である。

学力の育成には葉っぱと幹、根っこを調和的に育てること大切であるが、同じことは防災教育に

も言える。私が理想とする防災教育では、課題を与えられた子どもたちが、その解決を目指して、知識や技能を使い、友だちと相談し、親や地域の大人の意見に耳を傾け、考え、判断し、表現していく。

被災地での心のケアと防災教育

被災地では、防災教育への警戒感があるようだ。防災教育をすると子どもたちが被災を思い出して泣き出したり、辛くなったり、心や体の不調を訴えることがあるからだろう。そういう状況に陥らないように、防災教育を遠ざけようとする傾向がある。

私はこう考えている。

学校がいくら被災を避けても、テレビが唐突に映像を映し出す。それを見て、子どもは辛くなるかもしれない。登下校で被災のど真ん中を通り続ける子どももいる。家に帰ると、被災が原因で苦勞している親を見るかもしれない。子どもはいつも被災という現実に向き合わされているのである。

辛くなったり、悲しくなったり、体の不調を覚えたりした子どもは、自分がおかしくなってしまったと悩むことがある。しかし、そうではない、これほどの体験なのだから辛くなること、調子が悪くなることは普通だと伝えたい。子どもたちの反応は普通ではない状況での普通の反応なのである（大人もそうだ）。そんな心と体の対処方法を学ばせることは、災害という現実を蓋をすることと比べてどれほど教育的であることか。被災地で

は、子どもたちの様子をじっくりと観察しながら、適切な防災教育と心のケアにつながる教育を行ってほしい。

災害体験を語り継ぐ意味

被災地で生まれた防災教育にはもう一つ注目すべき教育がある。災害体験から教訓を学ばせ、人としての生き方やあり方を考えさせようとする教育、あるいは教訓を次世代や「未災地」に伝え、社会の防災力を高める資源として活用しようとする教育である。

ここで私は一つの危惧を持つ。被災者に体験の「社会的な意味」だけを語らせようとする傾向が生まれる危険性があるのである。被災者の様々な思いのこもった語りから、「社会的な意味」だけを取り出そうとする傾向が生まれてくることである。

被災者の語りには、このようは「社会的な意味」ではなく、亡くなった人へのあふれる思い、災害体験の辛さ、支援への感謝と理不尽な支援への憤りなど、たくさんの整理できない思いが詰め込まれている。被災者はそんな「個人的な意味」を語って辛い体験と向き合おうとしているのかもしれない。「社会的な意味」を強調するあまり、「個人的な意味」を無視して欲しくない。「個人的な意味」を持つ語りは、人の心を揺さぶる力がある。その揺れ、戸惑いが、聞き手の心の中に防災を進めようとする芽を育んでいくこともある。そこを大切にしたい。

追記

本校で紹介した実践は、「防災教育チャレンジプラン」や「防災未来賞ぼうさい甲子園」、「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」などの優れた防災教育支援・顕彰プログラムの実践を参考にした。これから防災にとりくもうとする方は、ぜひホームページなどで事例を見つけて、参考にしてほしい。

「正解」のない防災教育の発想は、矢守克也・京都大学防災研究所教授、同大学大学院情報学研学科教授の「アクションリサーチ 実践する人間科学」（新曜社）をはじめ、多くの示唆に富んだ著書に学ばせていただいた。